

2019年11月12日

Japan: Courts and Culture

クイーンズ・ギャラリー バッキンガム宮殿

2020年6月12日 - 11月8日

英国ロイヤル・コレクションは、西洋のコレクションの中でも、非常に優れた日本美術作品を所蔵しています。それぞれの来歴は他に類がないほど独特であり、またその品質も一際優れています。このたびの展覧会「Japan: Courts and Culture」はコレクションの中から特に注目すべき作品を一同に集めて展示したもので、本館において初の試みとなります。イングランド王ジェームズ1世から現在の女王エリザベス2世まで、英国と日本との外交、芸術および文化的交流を物語っています。磁器、漆器、武具や刺繍絵の屏風など稀少な事例を紹介しながら、300年以上にわたるイギリス王室と日本の皇室との特異な関係について、今までとは違った見方を提案します。

1600年に設立されたイギリス東インド会社によって、イギリスが日本と直接交流できるようになる道が開かれました。1613年、イギリス東インド会社の貿易船が初めて日本に来航した時、指揮官であったジョン・セーリスは国王ジェームズ1世からの命を受け、当時皇室に代わり日本を統治していた将軍徳川家康宛の手紙と贈り物を持ってやってきたのです。その後セーリスは日本での居住と貿易の許可を得て、国王への贈り物と共にイギリスに戻りました。日本から持ち帰ったものの一つに武士の甲冑があり、それは英国内に伝わった最初の事例であって、また現在ロイヤル・コレクションに残されているヨーロッパ美術以外の作品の中でも最も早くに登録されたものです。

イギリスと日本との最初の直接交流は短いものでした。1630年代よりおよそ220年間、日本は外国からの影響を抑えるため、西洋に門戸を閉じていました。この間、西洋諸国の中で唯一オランダが、長崎の小さな居住地で日本との直接交易を許されていました。当時のヨーロッパでは磁器や漆器の製造方法がまだ知られておらず、エキゾチックな東アジア製品の需要はずっと高いままでした。

英国王室は、輸出用に特別につくられた漆器、磁器、織物などそれぞれにおける最高品質の事例を率先して収集しました。17世紀、女王メアリー2世は、住まいであったケンジントン宮殿とハンプトン・コート宮殿に日本の磁器を装飾品として持ち込みました。18世紀には、国王ジョージ2世の配偶者であったキャロライン王妃が漆器のすばらしいコレクションをもっていました。それから100年後、国王ジョージ4世は、ロンドンのカールトン・ハウスとブライトンのロイヤル・パビリオンの装飾に日本の磁器を取り入れ、より豪華に見せることを試みています。ジョージ4世によって収集されたものの多くは、精巧な金銅の装飾を磁器に組み合わせることで、シンプルな壺をポップリ入れにしたり、磁器の動物を香炉にしたりするなどして、磁器の新しい使い方を見出していました。

1850年代になり日本との交易が西洋に開かれたことによって、商品が自由に行き交うようになり、外交や政治的な結びつきが復旧しました。ヨーロッパ王室の中で最初に日本を訪れたのは、女王ヴィクトリアの次男、アルフレート王子（エディンバラ公）で、世界一周航海を行い、1869年に日本に立ち寄っています。王子は皇居にて明治天皇に謁見し、贈呈品の交換が行われました。王子に贈られた武士の甲冑の兜は、1537年に作られたものです。母である女王宛への手紙に王子は次のように書いています。「この国についてあなたに報告しようとするのですが、言葉がみつかりません。すべてが新しく、風変わりで、困惑させられています。」

英国王室から次に日本を訪れたのは、女王ヴィクトリアの孫、後に国王ジョージ5世となるジョージ王子と、その兄 アルバート・ヴィクター王子です。10代の王子達は、戦艦バカンテ号に海軍士官候補生として乗船し、1881年に日本への上陸許可を得て、明治天皇と昭憲皇后に謁見しました。二人は、父であるアルバート・エドワード王太子に贈られたティーポットとカップなど家族へのお土産と、国同士の交流を深めるための贈呈品を持ち帰りました。彼らの家庭教師であったジョン・ドルトンが纏めた公式日記によると、王子達は日本滞在中に腕に入れ墨を入れました。アルバート・ヴィクター王子は対のコウノトリを、ジョージ王子は西と東を意味する組み合わせである虎と龍を入れたとあります。

20世紀初頭になると、太平洋情勢におけるイギリス、日本両国の利権を確保するための軍事同盟として日英同盟が締結されました。この時期は芸術面での交流も進みました。最も重要な文化イベントは、1910年にロンドンで行われた日英博覧会で、日本工芸のデモンストレーション、音楽、スポーツやエンターテイメントが披露されました。東アジアの芸術品を熱心に収集していた国王ジョージ5世の配偶者メアリー王妃を含む、800万人以上の来場者が博覧会に訪れました。

日本皇室と英国王室の関係は、相互の親善訪問や、即位式や戴冠式など記念式典への出席、そして贈呈品の交換により深まりを続けています。1902年、小松宮彰仁親王は明治天皇の名代として国王エドワード7世の戴冠式に出席しました。その時、日本の四季を刺繍で描いた屏風を国王に贈っています。メアリー王妃は、1911年、最も熟練した漆芸家の一人である赤塚自得作の、天皇家の菊花紋の入った小箆笥を、国王ジョージ5世の戴冠祝いの品として受け取っています。1953年の女王エリザベス2世の戴冠式の際には、著名な漆芸家で、人間国宝の前身にあたる帝室技芸員に任命された白山松哉作の「驚蒔絵手箱」が昭和天皇から女王に贈られています。

以上

「**Japan: Courts and Culture**」於クイーンズ・ギャラリー、バッキンガム宮殿
会期：2020年6月12日から11月8日

展覧会図録「**Japan: Courts and Culture**」（ロイヤル・コレクション・トラスト出版）
定価£29.95（ロイヤル・コレクション・トラスト・ショップにて販売）

来場者情報とクイーンズ・ギャラリー、バッキンガム宮殿のチケットは、
www.rct.uk をご参照ください。（電話 +44 (0)30 3123 7301）

一部の展示品について画像が www.picselect.com から公開されています。
詳しい情報や画像の閲覧につきましては、ロイヤル・コレクション・トラスト・プレス部門 電話+44 (0)20 7839 1377、press@rct.uk までお問い合わせください。

注記

ロイヤル・コレクション・トラストは英国王室の一部局で、ロイヤル・コレクションの管理に責任を持ち、また、女王の公式邸宅の一般公開を管理しています。ロイヤル・コレクション・トラストは慈善団体に登録されており、入場料や関連する商業活動から得た収入は、直接トラストの利益になります。トラストの運営目的は、ロイヤル・コレクションの管理と保存、そして、それらの品々の展示、出版、貸し出しや教育活動を通じて、コレクションの魅力を伝え、公開を推進することです。ロイヤル・コレクションの活動は、公的資金なしで行われています。

ロイヤル・コレクションは、世界で有数の規模と重要な美術品のコレクションを持ち、ヨーロッパの王室コレクションでも手つかずで残っているもののひとつです。それは、あらゆる種類の美術品や装飾品が登録されており、英国全土の 15 の王族の邸宅や元邸宅に収蔵されているもので、定期的に一般公開されています。ロイヤル・コレクションは、女王により承継者と国に信託されたもので、女王により個人的に私的所有されているものではありません。

Admission to The Queen's Gallery, Buckingham Palace is managed by The Royal Collection Trust, a registered charity in England and Wales (1016972) and in Scotland (SCO39772).